様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：１４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０４７７４

研究課題名（和文）音楽の真正性に着目した音楽科の教科内容の構築とプログラム開発

研究課題名（英文）The Development of System and Program of Subject Content in Music Class Based on the Concept of The Authenticity of Music

研究代表者
清村　百合子（KIYOMURA, Yuriko）

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：５０４２３２２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、音楽の真正性に着目した音楽科の教科内容の構築およびそのプログラムを開発することである。研究成果として次の３点を導出した。①「音楽の真正性」とは自然と芸術をつなぐ「拮抗し合うエネルギー」にあるということ、②学校音楽教育において子どもが経験する教科内容の体系を導出したこと、③教科内容についての認識を深めるための授業デザインの視点を明らかにしたこと、である。音楽の真正性に着目した音楽経験の実現は、子どもの生活経験と音楽表現の連続を可能にする。つまり、音楽の真正性に着目した教科内容の構築とそのプログラムの開発とは、人間と芸術との根源的なかかわりに着目することといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では自然と芸術とをつなぐ「リズム」に音楽の真正性を見出し、それを生かした教科内容の構築およびプログラム開発を行なった。本研究の学術的意義は、①人間と芸術との根源的なかかわりを重視した教科の本質的意義の提示、②教科の本質に基づいた教科内容の導出、③学校音楽教育を通した子どもの生命力の回復、の３点にある。また本研究の社会的意義として、①教科内容に関するフレームワークの提示は現場教員にとって授業デザインの手がかりになる、②就学前から小学校、中学校、高等学校に至る体系的な音楽科カリキュラムが実現する、③教科内容の構築およびその実践は音楽科の学力育成に寄与する、の３点が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：　The purpose of this project is to develop the system and program of subject content in music class based on the concept of the authenticity of music.
1. It is clarified the developmental aspects from natural rhythm to artistic rhythm through Dewey's publications, "Art as Experience". In conclusion, the authenticity of music was the opposed energy between natural rhythm and artistic rhythm. 2. It is clarified the system of subject content in a music class based on the concept of generating music. Through analyzed the case study of "Uta-dukuri", the form of the song is generating and feeling on children's daily experience is clarified. 3. It is clarified the point of view of the construction in music class to develop the recognition about subject content. 1) The experiment for recognition about subject content, 2) The observation about subject content, 3) The use of multiple mediums for recognition about subject content, 4) The reflection in music experience.

研究分野：音楽科教育学

キーワード：音楽科　教科内容　真正性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）平成 20 年の学習指導要領改訂において、学力育成の要請に応じて音楽科では〔共通事項〕が新設され 10 年経過した現在、①教材と〔共通事項〕のミスマッチの問題、②〔共通事項〕が体系化されていないことによるカリキュラムの不連続、などの課題が挙げられている。つまり「音楽活動を通して何を学ぶのか」という学習の対象が明確にされてこなかったという問題が音楽科にはあった。

（２）平成 29 年に学習指導要領が新たに改訂され、各教科で育成すべき資質・能力の明確化とともに教科で学ぶ本質的意義がいま問われている。しかしながら音楽科は実技系科目といわれるように、歌う、演奏するといった活動重視でそこで「何を」学んでいるのかという点に関しては曖昧にされてきた。

以上より、研究開始当初の背景として、活動重視の音楽科において「何を学ぶのか」という学びの対象、すなわち教科内容を明確にする必要があると考え、本研究ではその問題を解決すべく、音楽科における教科内容を確立するとともに、それに基づいた学習プログラムの開発を目指した。なお、ここでいう教科内容とは各教科で教えるべき基本的な概念・法則・原理・用語・技術の体系のことを指す。

２．研究の目的

本研究の目的は、音楽の真正性に着目した音楽科の教科内容の構築およびそのプログラムを開発することである。本研究を通して音楽の真正性に着目した音楽科の教科内容の体系を導出することで、学校教育現場で汎用可能性のある学習プログラムの提案を目指す。

３．研究の方法

（１）「音楽の真正性」とは何かを解明するために、本研究では「生活と芸術との連続性」に着目したジョン・デューイの芸術論を理論的根拠とし、音楽の真正性とは何かを明らかにし、音楽科の教科内容を把握するための手がかりを得る。

（２）理論的根拠に基づいて音楽科における教科内容を導出する。

（３）音楽の真正性を重視した音楽経験において、表現者である子どもは表現の論理をどのように形成していくのか、その形成過程を明らかにすることで、人間が音楽を形づくるプロセスを明らかにする。

（４）子どもの認識に焦点を当て、実際の音楽表現活動の分析を通して、子どもは教科内容をどのように認識していくのか、実践を通した教科内容の体系を明らかにする。

（５）以上を踏まえ、音楽科授業において教科内容についての認識を深めるための学習プログラムを提案する。

４．研究成果

（１）音楽において「真正性」とはなにか。本研究ではデューイの「リズム」概念に依拠し、理論構築を行なった。デューイの芸術論を検討したところ、自然と芸術とを連続してつないでいるものは「拮抗し合うエネルギー」であり、それがリズムの根幹をなすものであることが明らかとなった。つまり「音楽の真正性」とは、この自然から芸術をつなぐ基軸としての「リズム」、つまり「拮抗し合うエネルギー」にあるという結論を見出した。また自然のリズムから芸術のリズムへの発展的様相として、①自然のリズムの経験、②自然のリズムにおける意味の創出、③質的な媒介によるエネルギーの組織、の三層構造があることを見出した。

（２）各教科において教科内容を体系化するためには理論が必要である。そこで本研究では理論的基盤に「生成の原理」を置いた。生成の原理とは、人間の内的世界（イメージ、感情、認識等）と外的世界（音楽作品等）の両方に二重の変化が起こることである[1)]。この生成の原理に基づくと、音楽科の教科内容は音楽の形式的側面・内容的側面・技能的側面・文化的側面、という四側面となる[2)]。これらがカリキュラム構成の内容となり、また実際の学習における指導内容となる。

（３）音楽の真正性を重視した音楽経験において、表現者である子どもは表現の論理をどのように形成していくのか。その形成過程は、①個の音に意味を付与し、音を配置する、②イメージを手がかりに音と音とを関連づけるためのルール（重ねる、連ねるなど）を形成、③「漸増漸減」など音と音とを時間的に組織するための手法の導入、④時間的変化を強調するために諸要素の変更、である。音楽の真正性の重視、すなわち「拮抗し合うエネルギー」という視点から子どもの表現活動をとらえたことにより、表現の論理は子どもの生活経験や生活感情と連続性をもつことが明らかとなった。子どもを取り巻く自然や生活と連続したところに表現活動を位置づけることで、自然や人間に共通する生命のリズムと共鳴させた表現活動が実現し、それにより子どもは自らの生命のリズムを実感することができるといえる。

（４）音楽経験において子どもはどのように教科内容を獲得していくのか、本研究では言葉はいかにしてうたになっていくのか、「うたづくり」の実践事例より教科内容の体系を明らかにした。それは以下の通りである。言葉を何度も唱える中で「拍」が意識され、単なる言葉はまとまりを備えた音楽としてのうたになり、「抑揚」や「音高」「旋律」や「リズム」が生成され、パフォーマンスとしてのうたへと表現するために「声の音色」「強弱・速度」「形式」を変形させていく。これらの体系の発展を支えているのが「生活感情」であることが明らかとなった。

（５）教科内容についての認識を深めるための学習プログラムを提案するため、教科内容の認識を促す学習方法について実践分析を通して導出した。ひとつは感覚器官を働かせて自分の考えを試す行為の「実験」、二点目は比較聴取など音や音楽がどうなっているのか、その働きについて感覚器官を働かせてとらえる「観察」、三点目は言語だけでなく、視覚的媒体や身体の動きなど複数の媒体を組み合わせるという「複数の媒体の使用」、四点目は録音や中間発表など「自分たちの演奏を客観的に振り返る場」である。これら４点を音楽科の授業デザインに組み込むことで、教科内容についての認識を深める学習プログラムが実現する。

以上より、本研究では音楽の真正性は自然と芸術をつなぐ「リズム」にあることを見出し、それは「拮抗し合うエネルギー」を具現化したものであることを理論的に証明した。またそれを保証した音楽活動を行なうことで、子どもは自らの生命のリズムを実感することができ、生命力の喚起につながると考える。一方、言葉が音楽（うた）になる過程を分析した結果、教科内容の獲得と同時に生活感情とのかかわりも見出すことができた。つまり、音楽の真正性に着目した教科内容の構築とそのプログラムの開発とは、その音楽はどのような自然のリズムを基盤として生まれてきたのか、人間と芸術との根源的なかかわりに着目することといえる。

〈引用文献〉

１）西園芳信（2017）「１カリキュラムの哲学」『日本伝統音楽カリキュラムと授業実践–生成の原理による音楽の授業』音楽之友社，pp.8-9

２）同上，p.10

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 清村百合子	４．巻 第5巻第1号
２．論文標題 生成を原理とする音楽科授業にみる教科内容の体系 ―「うたづくり」の授業の場合―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本教科内容学会誌	６．最初と最後の頁 55-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 清村百合子	４．巻 第3号
２．論文標題 音楽科の教科内容についての認識を促す学習方法	５．発行年 2019年
３．雑誌名 学校音楽教育実践論集	６．最初と最後の頁 19-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清村百合子	４．巻 第60号
２．論文標題 自然のリズムから芸術のリズムへの発展的様相	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本デューイ学会紀要	６．最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清村百合子	４．巻 第4号
２．論文標題 子どもの音楽経験にみる表現の論理の形成過程―デューイの「リズム」概念を手がかりに―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 学校音楽教育実践論集	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 清村百合子
２．発表標題 生成を原理とする音楽科授業にみる教科内容の体系 ―「うたづくり」の授業の場合―
３．学会等名 日本教科内容学会第５回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 清村百合子
２．発表標題 音楽科の教科内容についての認識を促す学習方法
３．学会等名 日本学校音楽教育実践学会第23回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 清村百合子
２．発表標題 音楽経験における基層的リズムの受容と生成
３．学会等名 日本デューイ学会第61回研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 清村百合子
２．発表標題 子どもの音楽経験にみる表現の論理の形成過程―デューイの「リズム」概念を手がかりに―
３．学会等名 日本学校音楽教育実践学会第24回全国大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考